



中世ヨーロッパの修道院文化

古典はどのようにして現在まで伝
えられたか



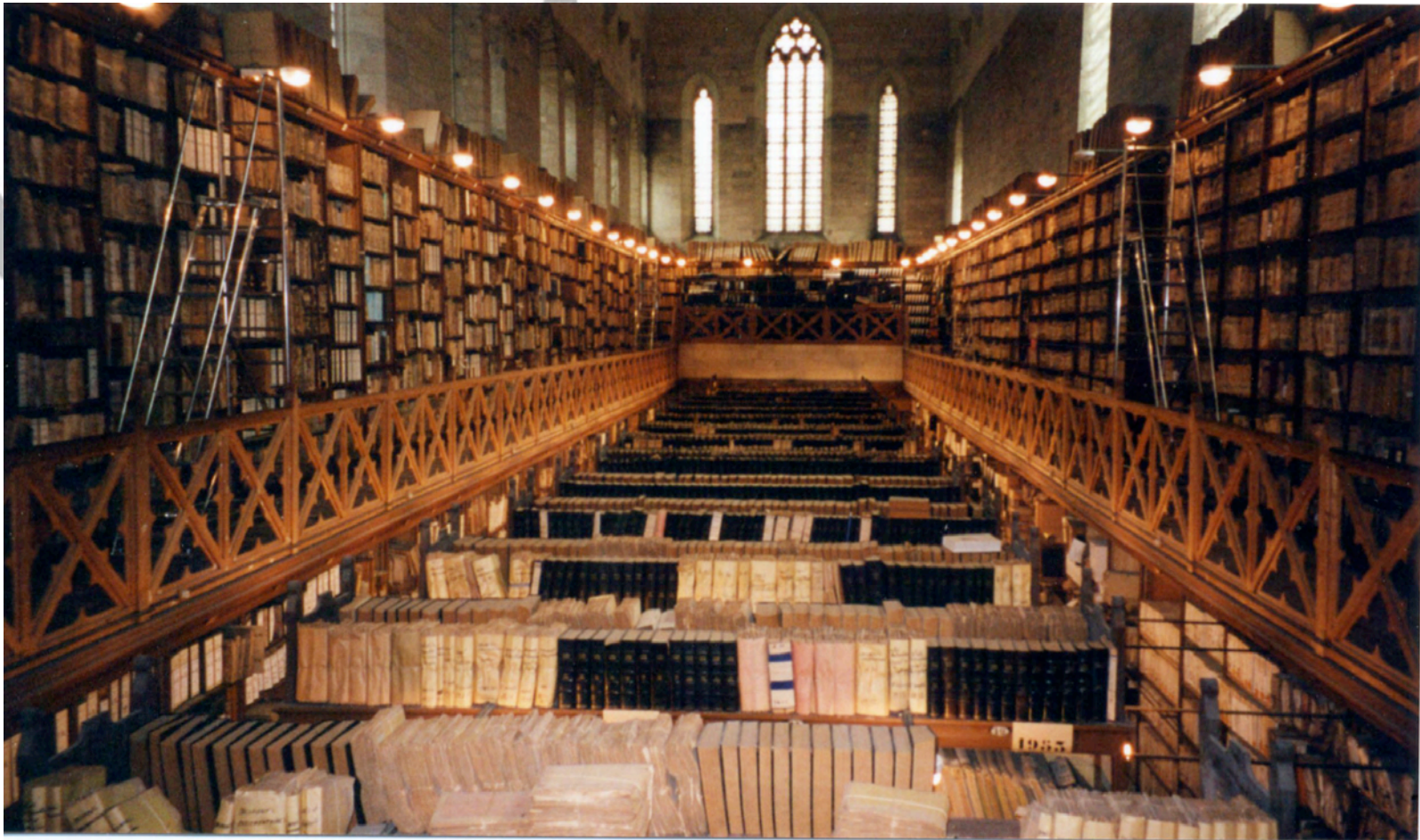
フランス国立図書館写本室



ロンドン新大英図書館



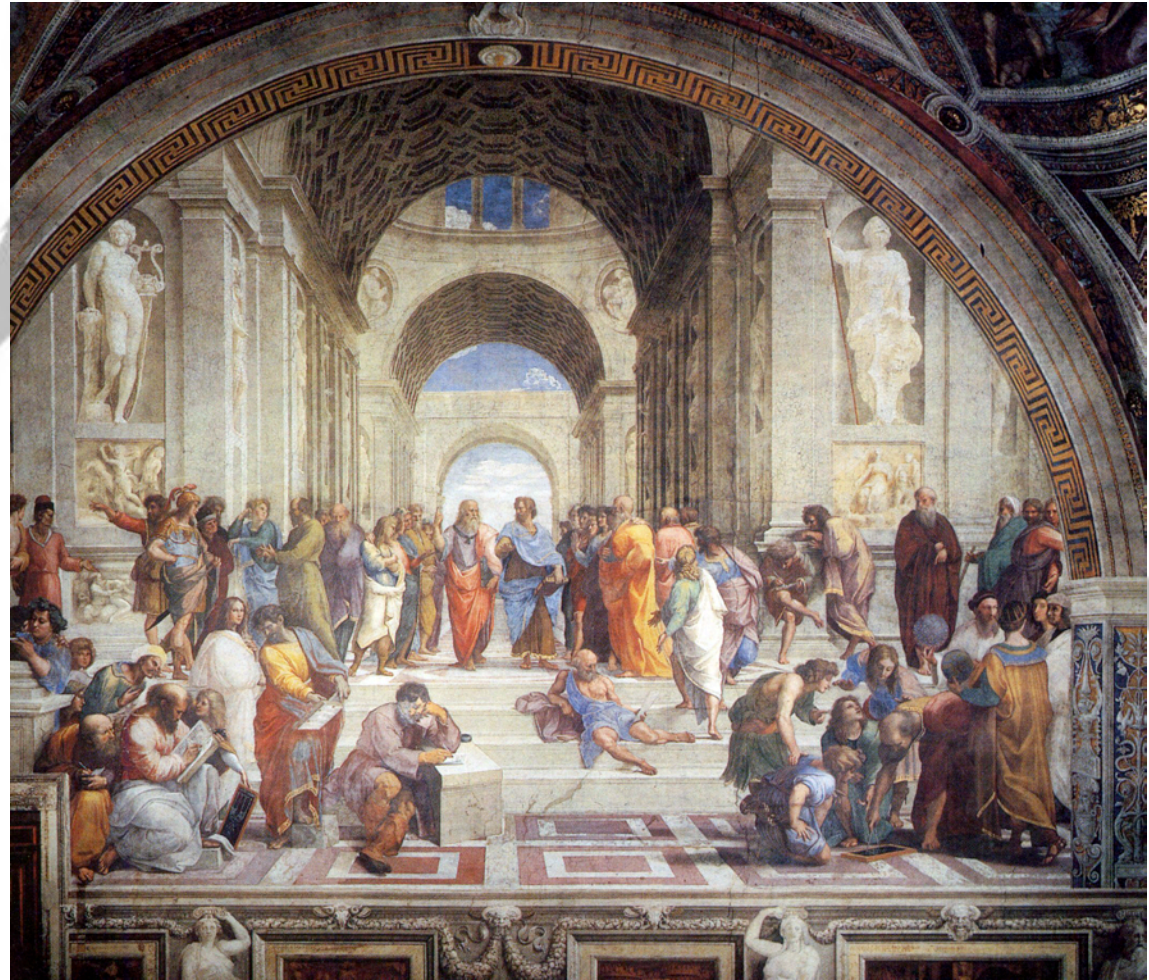
フランス ボクリューズ県立文書館 (旧アヴィニョン教皇庁建物内)



ラファエロの描くアテナイの学堂

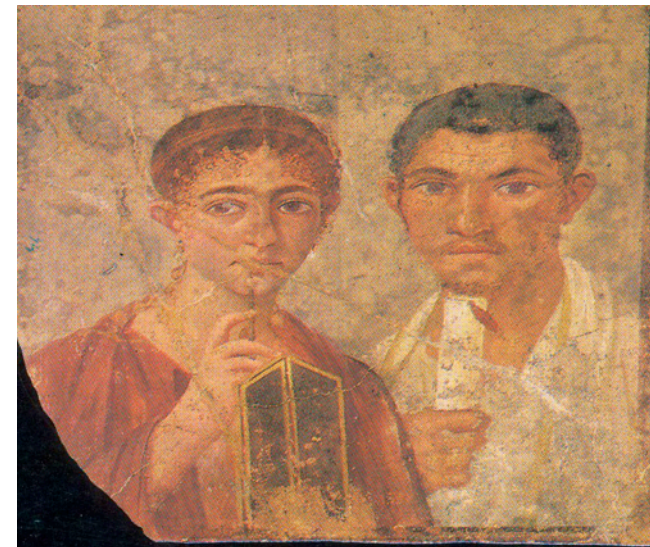
•時代の違いを無視して古代ギリシアの知的巨人を一堂に集めた。中央にいる赤い寛衣の人物がプラトン。右隣がアリストテレス。同列左で数人おいてモスグリーンンの男がソクラテス。ラファエロの古代哲学へのなみなみならぬ傾倒ぶりがうかがわれる。

(ヴァチカン所蔵)



•西暦79年8月24日のベスビウス火山の突然噴火は、麓の町ポンペイに大量の火山灰を降り積もらせ、この町を1世紀ローマ文化のタイムカプセルにした。

•これらはポンペイの町屋に描かれたフレスコ画。驚異的にモダンな描写は印象的。大事な点は描かれている女性が二人とも詩か手紙か、どちらも文字を書こうと想をこらしている姿。文字文化が広く普及していたということ。



•6世紀頃にビザンティン支配のもとにあったエジプトの書板。スレートに白墨で書く。

•先のポンペイ壁画にあった書板は、女性たちが手にしていたペンの様子から、ロウを流し込んだロウ板と思われる。

•パピルス紙はそれほど高価ではなかったが、草稿は書板に書いて最後にパピルス紙に書き写した。

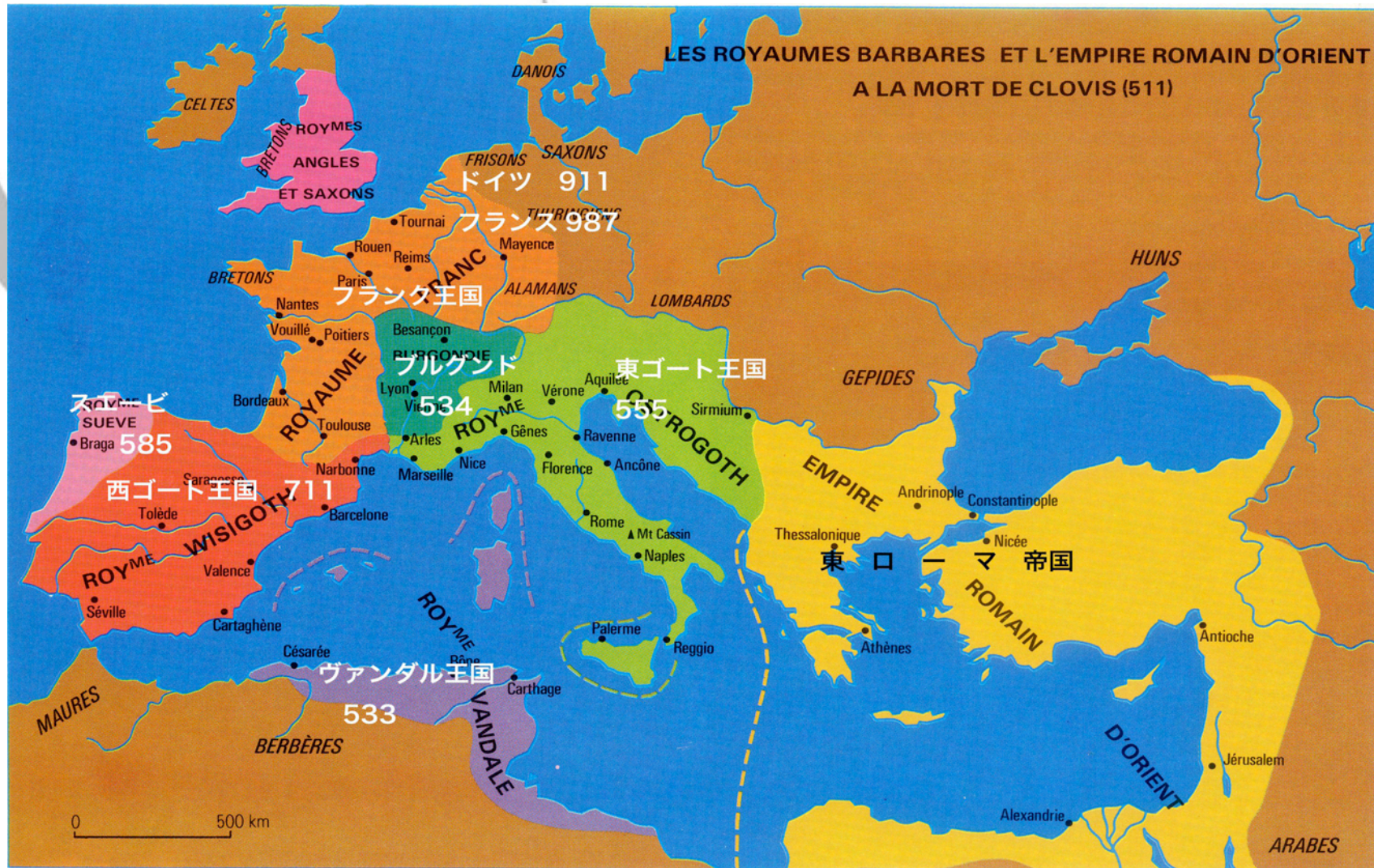


末期ローマ社会の禁欲への傾斜

- エジプト、シリア、シナイ半島、カッパドキア
etc. 砂漠の修道士。
- ローマ帝国の貴族出身者の修道士の輩出。
- 共住制と孤住制
(monachus)
- 禁欲の目的は？
- 社会的背景は？



ゲルマン部族国家



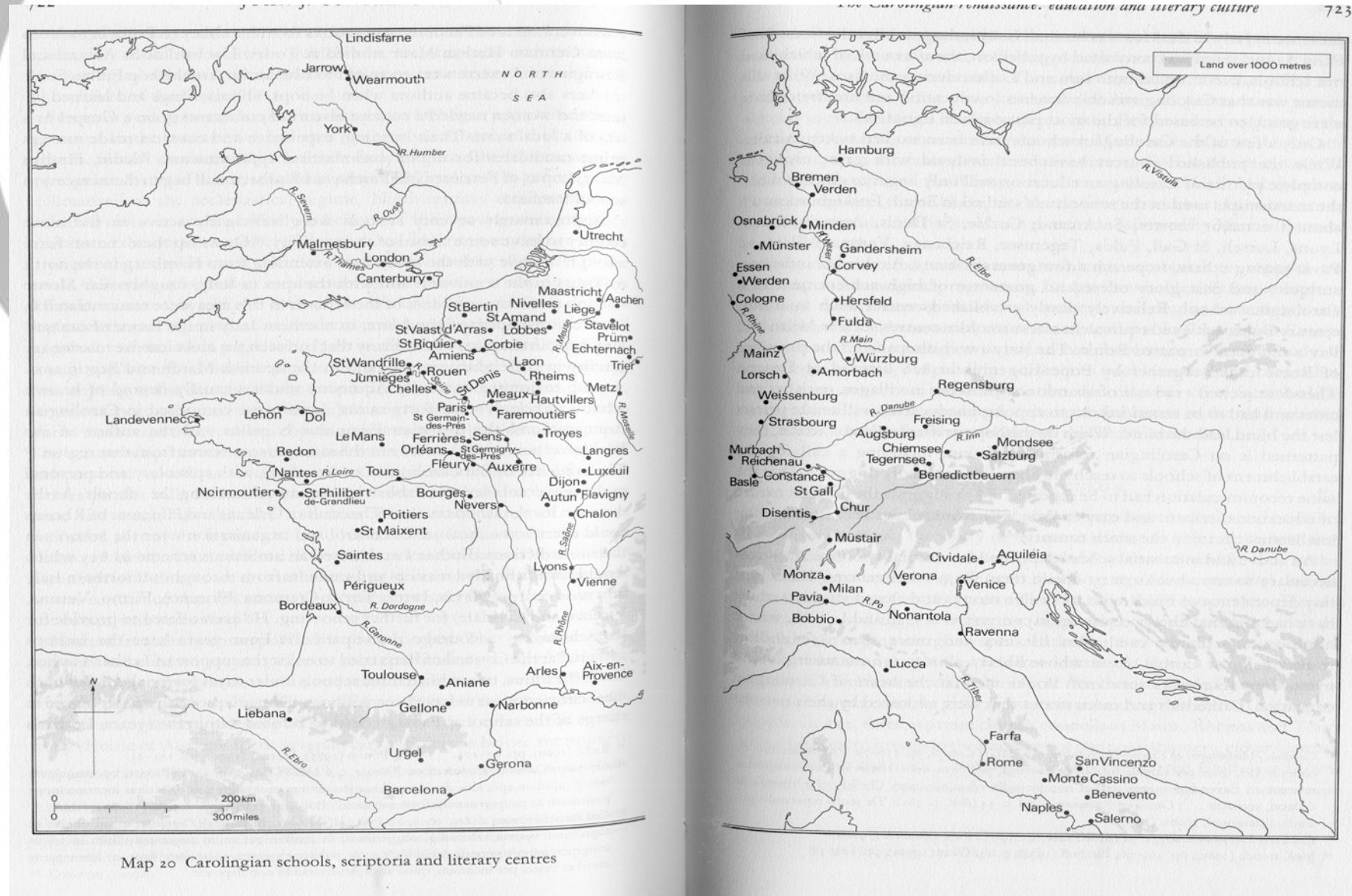
- 知の拠点としての修道院。
- 知的実践が禁欲の一形態とみなされた。
- 修道士が行う書写活動は、手労働として認知される。
- Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus (ca. 490~580)
ローマ帝国の貴族出身者で東ゴート王テオドリック大王に仕えたのち、故郷の Vivarium の修道院に隠棲。修道士たちを動員し、古代ギリシアやローマの古い写本を筆写させた。



自由七科の採用

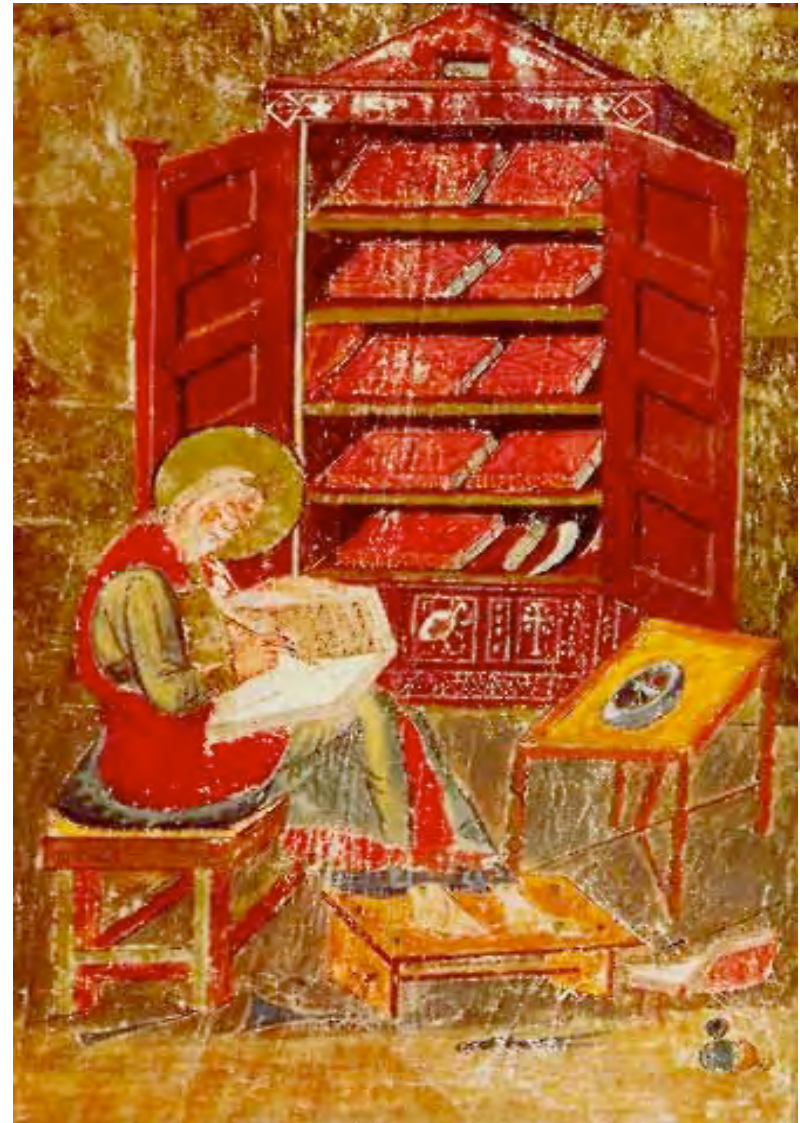
- カッシオドルスの最も重要な著作。『聖俗学教範 Institutiones divinarum et saecularum literarum』
- ヴィヴァリウムの修道士のために書かれた。
- 三学：文法、修辞学、弁論術。
- 四科：算術、幾何、音楽、天文学。
- 近代のリベラル・アーツ(Liberal Arts)と呼ばれる教養の基礎科目の源流。

中世初期西ヨーロッパの修道院



•筆写をおこなう
カッシオドルス

(Codex Amiatinus)



写本作成の様子

聖書イニシャルに見る写本所の仕事



①羊皮紙の納入 羊皮紙製造業者が、修道士に羊皮紙を納品している。13世紀に入ると世俗の写本所も活発化する。またこのイニシャルが示すように、羊皮紙製造は専門業者の手に移り、筆写やテキスト校訂と分離していた。13世紀を境に、書物の生産は修道院から大学や都市の出版業者に移行した。



②羊皮紙の裁断 修道士が定規とナイフを手にして、たたんだ羊皮紙を切っている。洋書には4つ折り、8つ折りというサイズがあるが、羊皮紙の場合も紙を4ないしは8つに折ってページの大きさを決めた。1頭の動物からいかに効率よく羊皮紙をつくるのか、穴や傷をどうするのかと、修道士たちは悩んだことであろう。



③罫線を引く ページのレイアウトを整えるために、へらや鉛筆で罫線を引く。写字生が真鍮の面持ちで、製図板のような机に広げられた羊皮紙に細かい罫線を引いている。1ページの行幅・行数・行間などの書式が、罫線を引く作業によって決定される。紙を重ねて針やへらで印をつけたものが多い。



④本文執筆 写字生は、ペンと小刀を持って原本を筆写した。小刀はペン先を削り、また誤記を修正するのに使われた。写字生の姿は、著者像とほぼ重なる。しかし時にはチーズをくすねた鼠に腹を立てる写字生も写本のページに登場する。



⑤口述筆記 聖書を広げた年輩の修道士が語る言葉を、若い写字生が書きとめる。口述筆記はおそらくこのような形で、広く行なわれていたに違いない。著者像としては、グレゴリウス大教皇の『対話篇』の冒頭と最後に、グレゴリウスが写字生に口述筆記させている例がよく知られている。

①から⑥は、1255年頃 コペンハーゲン王立図書館



⑥挿絵画家 画家は羊皮紙業者と同様の頭巾をかぶっているため、俗人であるかもしれない。彼は筆と角製の絵具入れを手に、男性の頭部を描いている。写本の全ページ挿絵はおそらくこのようにして、本文とは別個に制作されたのであろう。写本画家の自画像の可能性はあるが、確証はない。



⑦宇宙について講じる教師（アリストテレス、『著作集』イニシャルより） 書物を手にした教師が、年若い修道士たちに宇宙の秩序について講義している。彼らの頭上には、2人の天使がコスモス（宇宙）を表わす同心円を掲げて、講義の内容を示している。中世後期に創設された大学で日常的にみられた光景であり、当世風に身をやつた著者アリストテレスの姿とも考えられる。14世紀初頭 トゥール市立図書館（フランス）

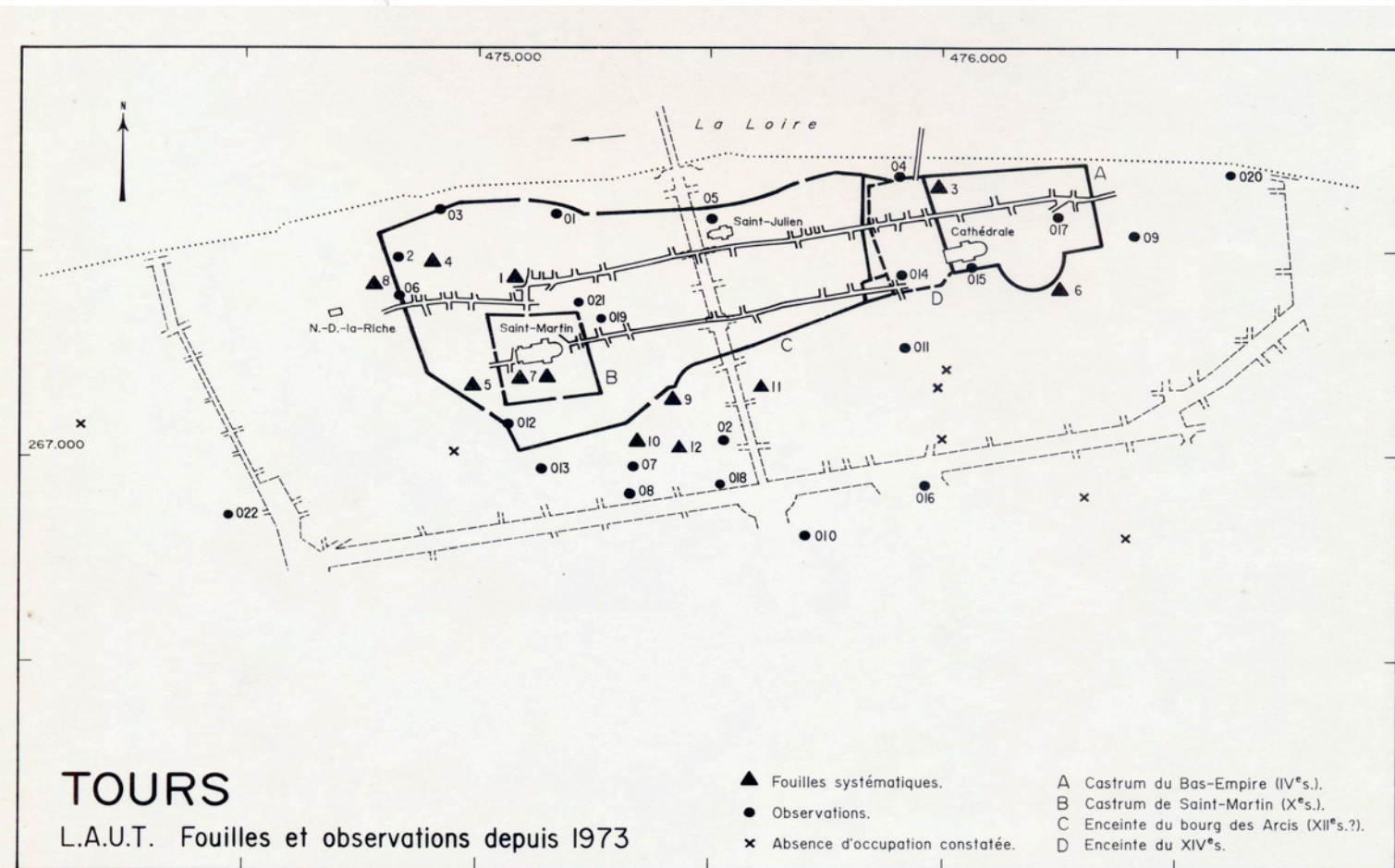
⑧写字生エドウィン（『エドウィン詩篇』より） 12世紀にカンタベリーで制作された『ユトレヒト詩篇』のコピーには、この写字生エドウィンの肖像が描かれている。実在の修道士が全ページに表現された例は、ひじょうに珍しい。彼はクライスト・チャーチ修道院の筆頭写字生として、誇らしげにペンと小刀を手に執筆している。描線の勢いを生かす、淡彩が施されている。12世紀中期 ケンブリッジ（イギリス）、トリニティ・カレッジ図書館



ロワール河畔のトゥール



都市トゥール



1. Saint-Pierre-le-Puellier ; 2. Atelier de potier (XV^e) ; 3. Site du Château ; 4. Rue du Petit-Saint-Martin ; 5. Saint-Clément ; 6. Rue des Ursulines ;
7. Rue Julien-Leroy et Cloître Saint-Martin ; 8. Rue de la Victoire ; 9. Saint-Michel-de-la-Guerche ; 10. 20-24 rue de Clocheville ;
11. Nouvelle République ; 12. Hôtel de Police.
01. Couvent des Carmes ; 02. Rue E.-Pallu ; 03. Enceinte du XIV^e siècle ; 04. Enceinte du XII^e siècle ; 05. Abords de Saint-Julien ;
06. Place de la Victoire ; 07. Rue Marceau ; 08. Boulevard Béranger ; 09. Rue Mirabeau ; 10. Hôtel Métropole ;
011. Extension de la Préfecture d'Indre-et-Loire ; 012. 74 rue Néricault-Destouches ; 013. Banque de France ; 014. Place François-Sicard ;
015. Musée des Beaux-Arts ; 016. Place du Maréchal-Leclerc ; 017. 17 rue Racine ; 019. Rue du Président-Murville ; 020. 65 quai d'Orléans ;
021. Rue du Petit-Soleil/rue de la Monnaie ; 022. Rue Ledru-Rollin.

サン・マルタン修道院（シャルルマーニュの塔）



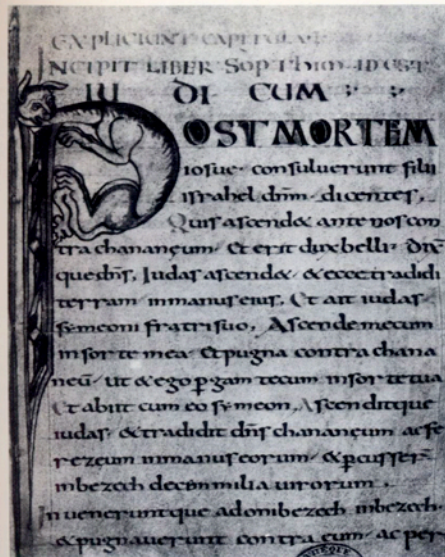
マインツ司教オトガリウスに聖書を献呈するラバナス・
マウルスを伴ったサン・マルタン院長アルクイヌス



トゥールのサン・マルタン修道院で作製され
西フランク王シャルル禿頭王に献呈された
大型聖書



旧約聖書と『エゼキエル書講解』



85. (f. 60).

85. Ancien Testament (Livres de Josué et de Ruth)

Amiens, Bibliothèque municipale, ms. 7.
128 ff., 305 × 200 mm.

Écrit avant 781 sur l'ordre de l'abbé de Corbie Maur-
dramne. Ce livre présente le plus ancien exemple daté de
minuscule caroline.

Bibl : LOWE, VI, n° 707.

J.V.

86. Saint Jérôme, Commentaire sur le Livre d'Ezéchiel

Paris, Bibliothèque nationale, ms. latin 12155.
Parchemin, 232 ff., 350 × 230 mm. Reliure carolingienne,
de cuir sur ais de bois, à décor estampé.
Corbie, viii^e siècle (2^e moitié).

La calligraphie est à elle seule un ornement dans cet
ouvrage patristique dont le texte est régulièrement copié sur
deux colonnes en écriture dite *ab*. Celle-ci, désignée
par le nom de ses deux lettres les plus caractéristiques,
semble avoir eu pour centre de diffusion le scriptorium de
Corbie au cours de la seconde moitié du viii^e siècle. On
trouve cependant au f.1v une pleine page consacrée à
l'incipit du prologue (1^{re} col. : *INCIPIIT PROLOGUS*;
2^e col. : *SCI/HIERO/NIMI/PRES/biteri*). Les capitales,
d'une hauteur variant de cinq à sept interlignes, sont com-
partimentées en éléments de formes diverses, peints alter-

nativement en orange, jaune pâle, violacé et vert assez sou-
tenu, couleurs employées tout au long du manuscrit. Vingt-
six initiales ornées sont réparties en tête des quatorze livres
composant ce commentaire et de la plupart de leurs
prologues. Ces initiales présentent souvent un décor
d'entrelacs colorés à structure assez lâche se détachant sur
fond d'encre comme on le voit ici au f.57 (« U » et « E »).
Bien que dominants, les entrelacs s'allient parfois ou font
place à d'autres composantes : ainsi la tresse terminée par
une tête d'oiseau et un fleuron formant la boucle du « P » au
f.91. Si l'élément zoomorphe est présent (ff. 132v, 193,
266), il demeure toutefois discret contrairement à son
importance dans le vocabulaire ornemental employé à
Corbie à la même époque mais dans des manuscrits
n'appartenant pas au groupe *ab*.

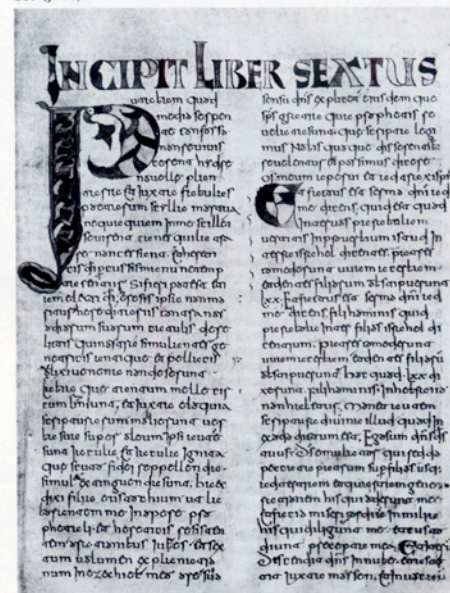
Au xviii^e siècle, le manuscrit passa à la bibliothèque de
Saint-Germain-des-Prés, puis en 1795-1796 à la Bibliothè-
que nationale.

Bibl : DELISLE, Cat. des mss., II, pp. 122, 434; ZIMMERMANN, 1916-
1918, pp. 197 sq., pl. 104c, 106-108; JONES, 1947, pp. 378-382; LOWE,
V, n° 623; JONES, 1963, p. 19; GASPARRI, 1966, p. 270; VEZIN,
1970, pp. 81 n.2, 84 n.2, 85, 99-100, fig. 1; WINTER, [1961] 1972, pp.
22, 57, 97; MERINDOL, 1976, II, pp. 873-875.

Exp. : Mss. à peintures, 1954, n° 14; Les Trésors de l'abbaye royale de Saint-
Pierre de Corbie, 1962, n° 4.

M.-T. G.

86. (f. 91).



修道院が救った古典作品の例

- 古代ローマの歴史家リヴィウスの『ローマ建国史』の後半部分がロルシュ修道院で再発見される(1527年)。
- ダレス・フリギウスの『トロイ戦史』の続編である『トロイ脱出記Exidum Troiae』が、北フランスのペロンヌ修道院で見つかった。
- ローマの戦術理論家ヴェゲティウスの『戦術論Epitoma rei militaris』はフルーリ修道院で800年頃筆写された。
- キケロの『雄弁論』はコルビー修道院で筆写された。

12世紀の翻訳活動の成果

12世紀の翻訳一覧

ギリシアの著作

著 者	著 作	何語から訳されたか	訳 者	時 代	場 所
ヒポクラテス	『箴言』その他	アラビア語	クレモナのゲラルド	12世紀後半	トレド
プラトン	『メノン』 『パイドン』	ギリシア語	ビサのフルグンディオ アリストIPPUS	1156年	北イタリア シチリア
アリストテレス	『分析論前書』 『分析論後書』	アラビア語	ヴェネチアのジャコモ	1128年頃	北イタリア
アリストテレス	『トピカ』	ギリシア語	クレモナのゲラルド	1159年	トレド
アリストテレス	『説小論』	アラビア語	クレモナのゲラルド	1128年頃	北イタリア
アリストテレス	『自然学』	アラビア語	訳者不詳	12世紀	トレド
アリストテレス	『靈魂論』	アラビア語	訳者不詳	12世紀	トレド
アリストテレス	『生成消滅論』	アラビア語	クレモナのゲラルド	1156年頃	シチリア
アリストテレス	『天体論』	アラビア語	アリストIPPUS	12世紀後半	トレド
アリストテレス	『気象学』(第4巻)	ギリシア語	クレモナのゲラルド	12世紀末	北イタリア
アリストテレス	『形而上学』(1-3巻)	アラビア語	セビリヤのファン	12世紀前半	トレド
アリストテレス	『原因論』	アラビア語	クレモナのゲラルド	12世紀後半	トレド
エウクレイデス	『原論』	アラビア語 (アル・ハッジヤージ版より)	バースのアデラード	12世紀初頭	ス페인
エウクレイデス	『与件』	アラビア語 (フナイン版より)	カリンティアのヘルマン	12世紀前半	トレド
エウクレイデス	『光学』	アラビア語	クレモナのゲラルド	1160年頃	シチリア
エウクレイデス	『反射光学』	アラビア語	訳者不詳	12世紀	トレド
エウクレイデス	『重さと軽さについて』	アラビア語	クレモナのゲラルド	12世紀後半	トレド
アポロニオス	『円錐曲線論』	アラビア語	ティヴォリのプラトン	1136年	シチリア
アルキメデス	『円の求積』	アラビア語	クレモナのゲラルド	1175年	トレド
ヘロン	『気体学』	ギリシア語	訳者不詳	12世紀末	シチリア
ブトレマイオス	『アルマゲスト』	アラビア語	クレモナのゲラルド	1136年	トレド
ブトレマイオス	『ケントロキウム』	アラビア語	訳者不詳	1138年	トレド
ブトレマイオス	『テトラビプロス』	アラビア語	セビリヤのファン	1143年	トゥールーズ
ブトレマイオス	『球面平画法』	アラビア語	ティヴォリのプラトン	1150年	シチリア
ガレノス	『光學』	アラビア語	カリンティアのヘルマン	12世紀後半	トレド
ガレノス	『テグニ』その他	アラビア語	ハレルモのエウゲニウス	1185年頃	北イタリア
プロクロス	『自然学原論』	アラビア語	クレモナのゲラルド	1160年頃	シチリア

アラビアの著作

著 者	著 作	訳 者	時 代	場 所
アル・フワーリズミー	『コーラン』 『アルゴリズム』 『天文表』	{カリンティアのヘルマン チェスターのロバート バースのアデラード	1143年 12世紀前半 1126年	セゴビア
アル・キンディー	『代数学』 『知性論』 『五本質論』 『光学』 『夢と幻覚』 『医薬合成階梯』	カリンティアのヘルマン チェスターのロバート クレモナのゲラルド セビリヤのファン クレモナのゲラルド	1140年頃 1145年 12世紀後半 12世紀前半 12世紀後半	トレド
アル・ファルガーニー	『天の運動について』	セビリヤのファン	12世紀前後	トレド
サービット・イブン・クッラ	『カラストゥーンの手』 『太陽年について』	クレモナのゲラルド	12世紀後半	トレド
アッ・ラージー	『アル・マンスールの手』 『小医学入門』	クレモナのゲラルド	12世紀後半	トレド
アル・バッターニー	『星の運動について』	ティヴォリのプラトン	12世紀前半	トレド
アル・ファーラービー	『諸学の枚挙』 『三段論法』	チェスターのロバート グンティサルボ クレモナのゲラルド	12世紀前半 12世紀後半	トレド
ハリ・アハース	『王の手』 『薄明について』 『光学』	アンティオキアのステファヌス クレモナのゲラルド	1127年頃 12世紀後半	トレド
イブン・アルハイサム	『治療の手』(哲学的自然学的部分)	訳者不詳	12世紀末	トレド
イブン・シーナー	『治療の手』(化学的地質学的部分)	{グンティサルボ セビリヤのファン	12世紀前半	トレド
アヴィケブロン	『医学典範』 『生命の泉』	サレシェルのアルフレッド クレモナのゲラルド	12世紀末 12世紀後半	ス페인 トレド
アル・ガザリー	『哲学者たちの意図』	{グンティサルボ セビリヤのファン	1150年	トレド

写本から印刷本、そして電子本へ

